

## 山形)宝塚で育った親子ジェンヌ

2014年2月9日03時00分

印刷

メール

スクラップ



宮本千鶴さん（手前）とえりかさん＝山形市

宝塚歌劇が今年で百周年を迎える。山形市でダンススタジオを主宰する宮本千鶴さん（66）と、娘のえりかさん（38）は、母娘共に狭き門をくぐり抜けた山形県出身のタカラジェンヌだ。節目を機に、厳しく鍛えられた宝塚時代と、指導を通じて今どきの子どもや若者について感じたことを聞いた。

千鶴さんの芸名は青葉みつる。映画や演劇が好きな両親の影響もあり、小学5年生から山形市内でバレエを習った。中2のとき初めて歌劇団の山形公演を見て、「私の進む道はこれ」。宝塚なんて知らなかったが、迷いなく決めた。

受験で兵庫県宝塚市へ行くまで、宝塚音楽学校は、東京近辺にあると思っていた。4倍を突破し、52期生として53人と音楽学校に。関西、関東弁が飛び交うなかブーズー弁は一人だけだった。

「外国にいるような気持ちで不安がいっぱい。話しかけられても方言まるだしでなまりも強いから恥ずかしくて返事もまもらない。演劇の授業は本当に毎回恐怖でした」。勉強を支えに逆境に耐えた。

1972年の東京公演の最中に車の追突事故にあった。首と腰を痛めて公演を休み、1カ月入院。後遺症に悩み退団を決意した。

結婚し、娘のえりかさんのバレエ通いとともに、千鶴さん自身もレッスンを再開した。ジャズダンスを学び、91年にスタジオを設立。いま、5歳から50代までを教えている。



娘のえりかさんの芸名は美椰えりか。38倍の難関を突破した80期生だ。同期は39人で、歌劇団には6年いた。強烈な思い出は「地獄の掃除」だという。

学校1年目の予科時代。毎朝掃除を約1時間半、1年間続けた。ピアノは鍵盤をふくだけでなく、メーカーの文字まで綿棒でなぞってピカピカに。先輩が練習でピアノを弾くとまた指紋ふき。授業の合間の掃除を毎日毎日続けた。

えりかさんは退団後、芸能活動をへて東京の大手音楽事務所で働いた。



厳しい指導を受けた2人。今度は指導する側の千鶴さんは「以前は4歳から小6までダンスをがんばり、中学に入るとき部活に変更するか教室に通い続けるかを選んでいたので、1年もたずにやめるケースが目につくの」と話す。「厳しさのなかでこそ正しい基礎が身につく、強い精神力も養われる。何もわからないままやめていくのは本当に残念」。そしてこう続けた。「必死に食らいついて学ぶこと、がんばることは格好悪いことではないの。夢は見るものではなく自分で築いていくものなのです」

えりかさんは、育成したアーティストに「地獄の掃除」の話をよくしたという。「あいさつをきちんとする。スタッフを大切に。練習は真剣に。そんな当たり前のことが出来るようになる前に不満を口にするようでは、長続きしません」（上田真仁）

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © 2014 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.